

彭 悦（笹尾洋介 准教授）

日本語映像作品の視聴と語彙学習—字幕利用に焦点を当てて—

本研究の目的は、中国語を母語とする日本語学習者の映像作品字幕の利用実態、及び字幕がその語彙学習に与える影響について明らかにすることである。本論文は、以下の 6 つの章で構成されている。

まず、第 1 章では、本研究の背景と課題について説明した。外国語や第二言語の学習において、語彙学習は極めて重要である。学習者にとって教室内での学習時間は限られているため、学習者は授業外での努力や工夫が必要である。近年、映像作品の多視聴を通じて語彙を増やすことが推奨されているが、映像作品の内容を理解するには一定以上の言語運用能力が求められる。そこで、学習の初期段階から映像作品を利用して語彙知識を習得できるように、字幕を学習の足場かけとして利用することが考えられる。近年、映像作品字幕の利用に関する研究が増えつつあり、字幕の言語タイプをはじめとする多様な字幕調節が検討されている。ただし、日本語を目標言語としたものは限られている。

日本語映像作品字幕の効果的な利用を図るためには、学習者の字幕利用実態及び字幕が日本語語彙学習に与える影響について把握する必要がある。その準備としては、中国語母語話者の日本語音声語彙サイズを測定するためのテストを作成・検証する必要がある。また、映像作品視聴を前提とする学習場面に関連して、中国語母語話者の「音声語彙知識」（本研究では、語の発音から意味がわかるかを指す）の特徴を調べる必要もある。そこで、本研究では、課題 1「中国語母語話者を対象とした日本語音声語彙サイズテストはどの程度妥当なものといえるか」、課題 2「中国語母語話者の日本語音声語彙知識にどのような特徴があるか」、課題 3「中国語母語話者の日本語映像作品字幕の利用実態はどのようなものであるか」、課題 4「日本語映像作品字幕は、中国語母語話者の語彙学習にどのような影響を与えるか」という 4 つの研究課題を設定した。

第 2 章では、本研究に関連する概念や先行研究を紹介した。具体的には、まず、(1)言語学習における語彙学習を中心に、その定義や測定方法、日本語語彙の構成、並びに中国語を母語とする日本語学習者の語彙知識の特徴について概観した。次に、(2)言語学習における映像作品及びその字幕の利用について、関連概念や種類を整理した上で、言語学習において効果を発揮するとされる理論枠、及び学習者の利用実態を説明した。それから、(3)映像作品字幕の提示が語彙学習に与える影響について、字幕の言語タイプをはじめとする様々な要因を取り上げ、先行研究の知見を確認した。最後に、先行研究を踏まえて 4 つの不足点（すなわち、日本語音声語彙サイズを測定する道具が欠如していること、中国語母語話者の音声語彙知識の特徴に関する研究が不十分であること、学習者の字幕利用実態において未解明の点が多いこと、日本語映像作品の字幕が語彙学習に与える影響に関する検討が限定的であること）を提示し、本研究の位置づけを明確にした。

第 3 章では、課題 1 と課題 2 を扱った。課題 1 に関しては、既存の日本語語彙サイズテ

スト VSTRJ-50K（本論文では「文字版 VST」と称する）をもとに、中国語母語話者向けの音声版日本語語彙サイズテスト（本論文では「音声版 VST」と称する）を作成した。また、中国語を母語とする日本語学習者に音声版 VST を実施し、114 名による回答をもとに、予備的な妥当性検証を行った。具体的には、ラッシュ分析で出力された多種の指標と先行研究の既存データである文字版 VST における項目難度データ・使用頻度順位データ，ならびにテストの作成・実施に関する詳細情報を用いて、(1)内容的側面，(2)本質的側面，(3)構造的側面，(4)一般化可能性の側面，(5)外的側面，(6)結果的側面という 6 つの観点から、音声版 VST の妥当性を検討した。その結果、いずれの面においても、妥当性が概ね支持された。これにより、本音声版 VST は、中国語母語話者の日本語音声語彙サイズを測定するための有効な手段として利用できるといえる。また、課題 2 に関しては、中国語母語話者を対象に文字版 VST を実施した先行研究の結果と関連づけながら、中国語母語話者の日本語音声語彙知識の特徴について分析した。具体的には、課題 2-(1)「文字語彙知識との関連性から見て、中国語母語話者の日本語音声語彙知識にどのような特徴があるか」と課題 2-(2)「文字語彙知識との平均値の差から見て、中国語母語話者の日本語音声語彙知識にどのような特徴があるか」に細分化し、両テストの実施によって算出されたラッシュ項目難度推定値を用いて、語種の観点を取り入れながら比較を行った。その結果、第一に、中国語母語話者の音声語彙知識は文字語彙知識と一定の関連性が認められ、とりわけ外来語において相関が強く、和語との間に顕著な差が見られた。第二に、語種別に比較すると、漢語では音声語彙知識の方が文字語彙知識より難しく、和語と外来語では音声語彙知識の方が容易であることが示された。これらの結果は、語種ごとの特徴を踏まえた学習支援の在り方を示唆している。すなわち、漢語では発音と意味の結びつき、和語では発音・表記・意味の結びつき、外来語では表記と意味の結びつきを強化する支援が求められる。

第 4 章では、課題 3 を扱った。具体的には、課題 3-(1)「中国語を母語とする日本語学習者が日本語映像作品を視聴する際に、字幕の言語タイプの選択はどのような傾向があるか」、課題 3-(2)「字幕の言語タイプの選択に影響を与える要因は、どのような傾向があるか」、課題 3-(3)「日本語語彙知識の量の増加につれて、字幕の利用傾向（言語タイプの選択及びその影響要因）が変わるか」、課題 3-(4)「語彙学習に促進効果を持つ字幕の言語タイプについて、学習者はどのように認識しているか」という 4 つの下位研究課題を設定し、調査・分析を行った。527 名の調査協力者による質問紙の回答と、そのうち 108 名による音声版 VST の得点を用いて分析した結果、中国語母語話者による日本語映像作品字幕の利用実態について、以下のことが明らかになった。第一に、字幕の利用頻度について、中国語字幕と日中両言語字幕が最も多用される一方、第三言語を含む字幕の利用は限定的である。また、母語字幕の利用頻度が減少すると、無字幕での視聴が増加するといった、字幕選択の移行的傾向も見られる。第二に、字幕選択に影響する要因について、映像作品の内容への興味の深さが最も大きな影響力を持ち、字幕へのアクセスのしやすさや学習意欲の高さも関与している。特に、日本語字幕は他の言語タイプの字幕より学習意欲の変動に敏感である。第三に、音声語

彙サイズとの関連について、語彙量が増加するにつれて、「中＋三」字幕（本論文では、中国語と中国語・日本語以外の3つ目の言語を同時に提示する二言語字幕を指す）の利用が減り、無字幕での視聴が増え、字幕翻訳の面白さ（流行語使用等）の影響力が小さくなるという傾向がある。ただし、全体的に相関が弱いため、音声語彙サイズは字幕言語選択及びその関連要因の影響力における決定的要因ではないことが示唆されている。第四に、学習者認識について、語彙学習にあたっては日中両言語字幕の効果が最も広く認められており、特に意味面と使用面において他の言語タイプの字幕より圧倒的に多くの学習者に選ばれている。また、発音面の学習に関しては、日本語字幕が最も効果的な字幕として見られており、日中両言語字幕はその次である。以上の分析により、中国語母語話者の日本語映像字幕利用について、利用頻度、影響要因、音声語彙サイズとの関連、及び語彙学習効果についての学習者認識が解明された。これらの結果は、教材開発や授業設計、さらに学習者の自律的な映像視聴に対して多様な示唆を与えている。例えば、母語を含む字幕の利用を前向きに検討し、その効果を補完するための工夫を組み込む必要がある。また、アクセスの難易度によって学習者の字幕選択が不当に制約されないよう配慮し、学習者が多様な言語タイプの字幕を選択できる環境を整えることが望ましい。さらに、映像内容への興味や学習意欲が字幕選択に影響しうするため、教師は学習者の興味や目的を事前に把握しておくことが推奨される。

第5章では、課題4を扱った。具体的には、課題4-(1)「日中両言語字幕は映像作品の内容理解を促進できるか」、課題4-(2)「日中両言語字幕は語彙学習を促進できるか」、課題4-(3)「日中両言語字幕の有無を含む様々な要因は、語彙学習成果と関連しているか」、課題4-(4)「日中両言語字幕の提示によって、語彙学習成果に関する学習者の自己評価が変わるか」という4つの下位研究課題を設定した。71名の中国語母語話者を対象者に一連の調査項目（質問紙、音声版VST、視聴前の語彙テスト、映像視聴と内容理解問題、視聴後の語彙テスト、語彙学習成果についての自己評価、インタビュー）を実施し、得られたデータをもとに、日中両言語字幕が日本語映像作品視聴時の語彙学習に与える影響について、多角的な検討を行った。その結果、次のことが明らかになった。第一に、内容理解に関して、日中両言語字幕は映像内容への理解度を促進し、特に学習者間の差を縮小させる効果が確認された。第二に、語彙学習そのものへの促進効果として、発音と映像記憶の照合可能性（外来語）、発音と表記の結びつき（漢語）、発音と意味の結びつき（和語）において字幕提示による追加的効果が認められた。第三に、字幕を含む複数の要因と語彙学習成果との関連を分析した結果、日中両言語字幕は発音と映像記憶の照合可能性、発音と表記の結びつき、発音と意味の結びつきのいずれにおいても、語彙学習成果に有意に関連していることが示された。また、語彙知識の側面によって要因の組み合わせは異なるものの、字幕は(1)学習者の音声語彙サイズ、(2)対象語の語種、(3)学習者の対象語の発音への親近性、及び(4)対象語の映像素材での出現回数とともに学習成果に寄与していることも明らかになった。第四に、学習者の自己評価について、日中両言語字幕が提示された場合は、無字幕の場合より全体的に自己評価が有意に高く、語彙知識側面別に見ると表記面・意味面において顕著な差が見られた。また、字

幕条件・語種を問わず、発音＞意味＞表記の順に自己評価が高かった。これらの結果より、様々な教育的示唆が得られた。例えば、必要に応じて、日中両言語字幕を活用して映像作品の内容理解を支援することが推奨される。また、語種別の効果を踏まえ、漢語では発音と表記、和語では発音と意味、外来語では発音と映像記憶の連結の補強に、日中両言語字幕を利用する効果が期待できる。それから、字幕の効果は音声語彙サイズや語種など他の要因とともに働く点を踏まえ、利用時に多様な要因を複合的に考慮することが求められる。さらに、字幕利用後に振り返りや補助練習を設け、学習者の自覚的な成長を促すことにより、情意面の効果として新たな動機づけにつながる可能性がある。

第6章は、第3章から第5章までの調査内容・分析結果・教育的示唆を総括した上で、本研究の目的である「中国語を母語とする日本語学習者の映像作品字幕の利用実態、及び字幕がその語彙学習に与える影響」の解明に対して、本研究で得られた知見を先行研究と照合しつつ、全体的考察を行った。その後、本研究の不足点及び今後の課題を課題ごとに提示した。例えば、課題1に関しては、文字版VSTと音声版VSTはいずれも意味再認式の問題であるため、受験者にとっては当て推量の余地がある。今後は受験者の負担に配慮しつつ、産出式問題を併用する測定が望まれる。課題2に関しては、本研究では和語・漢語・外来語に限定して調査したが、今後は混種語も含めた検討や、語種以外に品詞など他の観点からの分析を通じて、日本語学習者の音声語彙知識の特徴をより精緻に解明することが期待される。課題3に関しては、本研究では字幕選択に影響する要因について9項目を取り上げたが、それ以外の要因が関与している可能性もあり、さらなる探究が求められる。課題4に関しては、映像作品の内容理解において、日中両言語字幕の促進効果は確認されたが、音声語彙サイズとの関連は見られなかった。今後は受験者集団を変えて、学習段階の進展に伴う変化を追究するとともに、「視聴解力」という新たな能力の構成や測定方法を探ることが望まれる。